

アメリカ英語の特色(IV)

American English by Albert

H. Markwardt を中心として

澤 田 照 徹

目 次

	頁
I 英語の語法.....	72
A. 標準的慣用語法 (Standard Usage)	73
B. 口語法 (Colloquialism)	73
C. 「方言」 (Dialect)	74
D. (卑) 俗語 (Vulgate; Slang)	76
II アメリカ英語の俗語の成立.....	79
III 俗語成立のアメリカ的温床と俗語の生命.....	88
IV 俗語の持つ特色.....	90
a. 俗語は短刀直入性を持つ.....	90
b. 俗語は多数の用法を持ち万能性を発揮する.....	92
c. 俗語は単節語であること, 破裂音・氣息音を持つことを好む.....	92
d. 俗語は男が造る.....	93
e. 俗語は「譬喩」である.....	96
f. 俗語は人間の五感にその基礎を持つ.....	97
g. 俗語は卑俗な語法ではない.....	100
h. 俗語は短命である.....	101
参考文献.....	103

アメリカ英語の特色 (Ⅳ)

アメリカ英語の社会的相異 (Social Variation)

I 英語の語法

以上で我々はアメリカ合衆国の国土を通じて広地域方言 (regional dialects) と局地的方言 (local dialects) とが、どのような配置で分布しているか、また主として年配者が用いる比較的古い時代の方言と、そうでない人々の用いる言葉の概略と、それに方言における意味の変化などに視点を置いて合衆国の方言の姿を眺めてきた。とはいえ我々は観察の視点のレベルを飽くまで、ある社会的水準 (certain social levels) 以上に属する人々の間に通用している方言、いい換えれば、標準的語法の観察に研究の対象を限定してきた。

けれどもこのような観察視点を保持したとなると、教育程度の比較的に低い人々が用いている所謂「二流英語」(substandard English), 「卑俗語・通語」(vulgate) または「俗語」(slang) など、いろいろな名称で呼ばれる語法は一体どうゆうものか、またそれが合衆国の国土でどのように行なわれているかの問題が同時に生じて来る筈である。

ところで本論をこの「二流英語」と言われるものに切り換えるに当ってまず認めておかなければならないことは、広くアメリカ人といっても各種各層の社会の人々がおり、話す言葉も集団毎に相当な相違があるということである。従って理解の便宜上ここでアメリカ人の用いている各種多様な言葉を、普通に認められている分類法に従って整理してみよう。そうすることによって我々が前章で取扱ったアメリカの3大方言の持つ社会的地位と、次の主題として取扱うことになっている二流英語 (substandard English) の持つ社会的地位とを一層はっきり理解することが出来るからである。

英語の語彙や句や言い回しは、それを用いる人間社会集団の位置する階層から眺めると、それには数個の水準 (several levels) があることが分る。

A. 標準的慣用語法 (Standard Usages)

この語法は所謂標準米語 (Standard American English) が持つ語法であって、総ての環境と、礼式をわきまえた公式の会合の場に於て教養あるアメリカ市民 (the cultured) の大多数が話し、理解し、容認するような語彙と句と表現様式から成り立っている。そしてそのような語彙はアメリカの標準的な辞書 (standard dictionary) の中に、語の持つ意味が十分に定義され、綴字 (spelling) も発音 (pronunciation) も十分に容認されているものが掲載されている。アメリカの3つの方言のうち主として中央国土方言 (または西部方言とも言った) は、まさに合衆国の標準米語なのである。例えば、この標準的慣用語法では、'Sir, you speak English well'. (もしもし、あなたさんは英語をお上手にお話しですね)・と言ってよい。

B. 口語法 (Colloquialism)

これは儀式張らない打ち解けた日常の会話や私信のような、くだけた通信の場で用いられるごくありふれた語彙・慣用句・言い回しから成っている表現様式である。これは公式な文書や商業通信文や、ごく丁重な談話で用いる標準米語の明快さと堅苦しさを持たないが、合衆国の教育ある総ての人々の日常談話の中で用いられ理解される語法であって、部類別から言えば標準米語 (Standard English) の1種である。それは後に述べる無教育な1部の人々がお互いの日常生活に用いる所謂「俗語」(slang) とは一線を画している。

「口語」は一般的な社会環境の下に於て、親密な間柄の人々が用いる語法であって、総ての種類の慣用的表現 (idioms) は「口語的」(colloquial) であると言ってもよいであろう。この語法では 'Friends, you talk

plain and hit the nail right on the head'. (「ねえ君達、君達が喋るのは実に分り易く、図星をずばり刺してるねえ」) と言ってよい。

C. 「方 言」 (Dialect)

「方言」とは、研究または説明のために特に選んだ地理的位置を持つ地域内に限って流通しており、他の地域では見られない固有独特な語彙・慣用句・言い回し、音の調子などを持つ談話慣習を言う。「方言的慣習」(dialecticism) とは、1種の「広地域慣習」(regionalism) であり、同時にまた「局地的慣習」(localism) でもある。「方言」は、一般的理解では、どれかの種族・民族 (ethnic group) を直ちに連想させるような用語や異国的音調 (foreign accents) や談話の型 (speech patterns) を指さすようにさえなっている。

例えば南部方言では、'Cousin, y'all talk mighty fine'. (「おい兄弟ノ 喋りっぷりすごくうめいなあ」) と言ってよい (cousin は a close friend (slang))。また同性の親しい仲間に対してなら、'You guys talk like kissing cousins'. (おい、変りもん、おめえらは通じ合った公認夫婦みていな喋りっぷりちゃんなあノ」) と言ってよい。また民族ぐるみに移住した住民 (ethnic immigrant) の「方言」では、'Paisano, ye speak good the English'. (「パイサノウどん、おめえさん仲々ええ英語を喋るねえ」) と言ってよいし、'Landsman, your English is plenty all right already'. (「おい新兵ノ おめえの英語もいまじゃもう言うことなしじゃ」) と言ってよい (landsman は seaman 「船に慣れた船員」と区別して言う)。

「方言」と標準的米語 (Standard English) に就いて言えば、前にも触れたように、地域をアメリカ国土一円の基盤に置いた場合には Kurath 教授の設けた中央国土方言は標準米語であり、北部地域及び南部地域で用いられる言語様式はそれぞれ1個の方言に過ぎず標準米語とは言えないであろう。それは丁度この標準的米語でさえ、英語の行なわれている世界全域という基盤の上に立てば、イギリスの標準的英語に対する一種の方言で

しかないと言えるであろうからである。同様にアメリカ北部及び南部にそれぞれ行なわれている言語についても同じことが言える。即ち北部及び南部の英語は標準的米語とは言えないというだけの事であって、これ等は後に述べる俗語即ち二流英語(substandard English)とは体質的に異ったものであるという事をここでは注意しておこう。

(付)

イ)「隠語」(Cant)

「隠語」とは、言語学者の用語としては特定の階級の人々、乃至は取引き仲間、専門職業従事者、派閥人、似かよった年令層、同好者、等の間で話され理解される平易な慣用表現を言い、一般人には理解困難なものが多い。掏摸(すり)・取り込み詐欺師など1部の人間どもの合言葉などもこの種の用語に入ってくる。例えばこれら悪の世界(underworld)に住む徒輩の‘college’は「矯正学校」の意味から刑務所(jail)を指し、‘captain’はルンペン仲間(Hobo)では「金離れのいい人間」(a free spender)を指す。

ロ)「くずれ語・ちんぷんかんぷん語」(Jargon)

「くずれ語」とは cant を語り理解する人間小群が用い、殊に専門職者や批評家などの用いるむずかしい専門語(technical jargon, critics' jargon など)であり、時には秘密語(secret vocabulary)でさえある。それは「(職場外でする)仕事の話し」('shop-talk')である。なお「くずれ語」というのは下に述べる Sandalwood-English(白檀英語)や Pidgin-English(pidgin は business の訛った音)と呼ばれる粗雑な混合言語を指す用語でもある。白檀英語とは、西太平洋全地域で土人の間に話されている破格英語で、これは英国人が行った黒人誘拐で違った島々から集められてきた土人が互に言語が通じないため、大体は英語から材料をとって造り上げた言葉であって、語彙が貧弱なため1つの概念を表わすのに既知の数個の語を用い、また英語的な文法もなく、数・格・時制などの変化もない。例えば「香水」を water belong stink(臭気)と言い(belong

は「…の」という風格の代り), 「羽」を grass belong pigeon と言い, 「知る」を feel inside, 「考を変える」を feel another kind inside のように言う。Pidgin English は英国人を相手に商取引をした支那人の用いた支那語の文法と英語の語彙とを併せて造った破格英語である。「2 本煙突, 3 本櫓の汽船」を 'thlee piecee bamboo, two piecee puff-puff, walk-along (=engine) inside, no can see' のように言う如きがそれである。

ハ) 「暗語・符丁語」(Argot [ɑ:gou])

上に述べた「隠語」や「くずれ語」のうち特に盗賊を業とする徒輩 (professional criminal groups) が用いる語彙を「暗語・符丁語」と言い, 綴字を逆の順序に並べて警官 (police) のことを ecilop と言い, 「ビール 1 瓶」(pot of beer) のことを 'top o' reeb' とする如きがそれである。

上に述べたイ, ロ, ハの 3 種の用語法を用いて, 1 つの命題を表現してみると次のようになる。即ち「隠語」では, 'CQ-CQ-CQ...the tone of your transmission is good.' (「もし, もし…そちらの電波通信音調明快!」) と言ってよいし, 「くずれ語」では, 'You are free of anxieties related to interpersonal communication' (「そちら発信秘密電文の受信好調, 異状なし!」) と言ってよいし, 最後の職業的盗賊の用いる「符丁語で言ってみれば, "Duchess, let's have a bowl of chalk." (「ねえあねご! ちょっと, 話そうじゃねえか」) と言ってよい (duchess は悪の世界の徒輩の女仲間, chalk は囚人用語で, 塩を振りかけた牛乳, a bowl of chalk は, 話者が 'talk' という語を使おうとしたが, わざわざそれを避けて, talk と同じ語韻を持つ chalk を使い, 更にそれと意味上関連のある別の語に and または of を添えて頭に乗せて作った所謂「押韻俗語」である (例, jug and pail=jail, Pope of Rome=home))。

D. 「(卑)俗語」(Vulgate; Slang)

「標準的米語」(Standard English) が, 教養あるアメリカ市民が用い

る語法として標準的な辞書の中に掲載され定義されている語法であるに対し、ここにD類のものとして掲げる「俗語」とは、教養のない人々が、それぞれの人間小集団の中だけの生活で話し、理解し、容認する語彙・句・発音を持つ表現様式である。教養のない人々の仲間だけに通用する語彙の多くは文書で書かれることは少く、口で喋られるだけのことが多い。「俗語」とは、おしなべてそういう性質の語法である。それは一般アメリカ人の多数の人々によって用いられ、理解される語法ではあるが、大多数 (majority) の人々によって「良い」(good) とされるに至らず、「正式の」(formal) もの と容認されるに至らない語法である。従って俗語に用いられる用語や言い回しは、標準的辞典には見出し語 (entry) としても掲出されているものは極めて少い。それ故に俗語的表現を搜ぐろうとするならば俗語辞典 (dictionaries of Slang) を参照する方が早道である。

俗語では我々は、セルフサービス食堂 (cafeteria) で食物を貰うのに行列を作って番が来るのを待っている時、"I was standing in the chow line". "So you will stand in chow line..." (「おらあ、並んで待ってたんだ」「おめえさんも、並んで待ってなよ」) と言ってよい (chow line は chow (=food) を出して貰おうとして食事時に食堂の入口に行列して待つ兵士・学生等の列)。また "He was certainly in the money. He'd made it gambling." (やつはたしかに大金を持ってやがった、そりゃ賭けで儲けた金だよ) と言ってよい。また "You couldn't keep no dog in here anyhow. What would you do when he had to go? Set him in the sink?" (こんな狭いところえ犬なんか持ち込んできて！糞する時にゃどうするんだ、持って行って下水溜めん中へ容れてこんか！) と言ってよい。《不必要に否定語を2回用いるのは俗語に多い。go=excrete 排泄する》。また, "The visiting Butter and Egg men [had] their whoopee in New York". (西部の金持農場主や実業家が東部のニューヨークの町えきて、飲めや歌えの大騒ぎをしよっての) と言ってよい (butter-and-egg men は特に人気物にならうとする大金持ち, whoopee はドンチャン騒ぎの中に起る叫び声で whoope-de-doodle からきたも

の)。また, “The Marx brothers ate in coffee pots and greasy spoons.” (マルクス兄弟は簡易食堂や安めし屋でめしを食べていたよ) と言ってよい (coffee pot は lunch counter セルフサービスの簡易食堂, greasy spoon は油で汚らしいめし屋)。

ぼう頭に我々は問題の中に ‘Slang’ と ‘Vulgate’ を併記したが, slang が本当に「卑俗」なのかどうか誤解を防ぐため更に一言述べておく必要がある。そうである。

slang という名で表わされる言語現象は複雑なものであるという事を先づ前提としよう。現今一般に用いられているこの語の意味では, それは非常に砕けた口語であって, 教育のある階級人の話す所謂標準語の中にはその位置を持たず, 教育のない階級人の用いる口語 (colloquialism) の中にその位置を持つ。然もそのような人間どもの日常用いる口語のうちでも殊に親しい間柄の会話の中に生れて発展する性質の言語であるというその特殊な起源から言って, 教育ある人士の耳には, 何とはなしに卑俗な語感を伴って響くのは避けられない運命にある。俗語発生 of 動機については次の項で述べることにするが, slang が教育ある人々の真面目な談話の場で用いられると, 浮薄なものに感じられるのは止むを得ないと言える。然し俗語は本質的に親しい人々の間の口語の一部分を構成し, その基盤の上でやがて標準語の語彙と成り得る可能性を持つ種類の言語でもあるので卑賤な階級の slang が全部 vulgar (野卑) なものであるとは言えないし, 却ってそれが大受けのする (fashionable) ものであることさえある。従ってそれが卑俗と感じられるかどうかは, その時代に於て標準語を話す階級の文化的レベルや性質によって違ってくる。英国でも17世紀後半の時代にはよい階級の人士が盛んに slang を使用したが, 19世紀のビクトリア朝時代 (1837—1901) にはそのような傾向は薄かった。このような観点から言って, 現代の標準英米語は slang で充満していると言える。それは第1次・第2次世界大戦が兵士仲間・学生仲間の slang を全く大手を振って通れる (respectable) ものに高めてしまったからでもある。

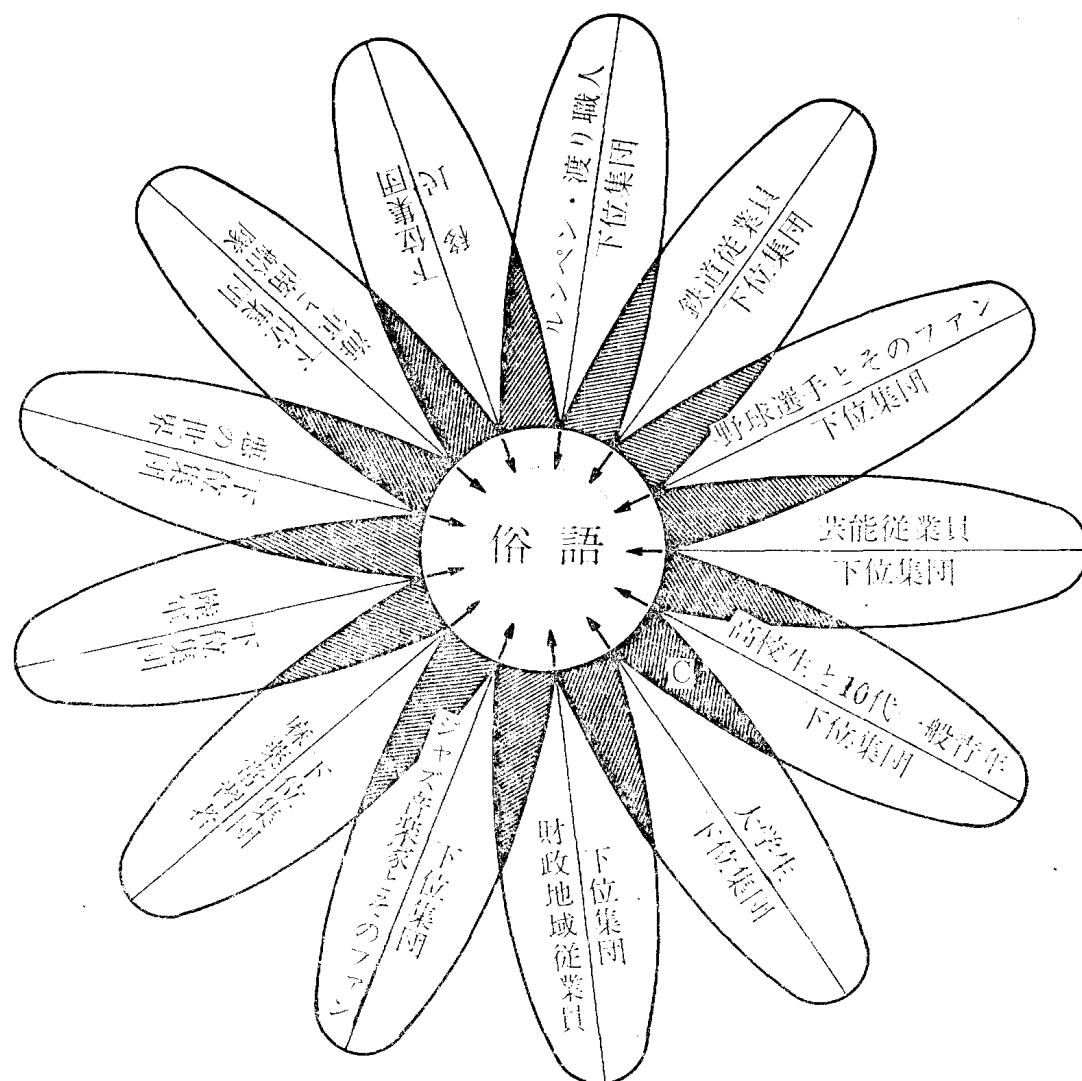
Ⅱ アメリカ英語の俗語の成立

アメリカ英語の俗語は、迅速で、分り易い、かつ喋り手の個性を含んだ談話の様式を狙っている。大抵の俗語は隠語(cant)、くずれ語(jargon)、符丁語(argot)の持つ用語と言い回しとにその起源を持ち、それ等の用語や言い回しが可成りの数の大衆の間に人気を博するようになった結果として、大衆によっても理解せられ使用される段階に迄成長した時に始めて、俗語(slang)の地位を獲得するに至る。そしてこのような俗語の多くは、それぞれの原語の性格をそのまま引留めて持っている。従ってその俗語を徹底的に理解出来るのは、その用語・言い回しの生い立ちの奥義を究めた者だけであると言える。

俗語とは隠語・くずれ語・符丁語群の中であって、それぞれの部分を構成すると同時に、残余の部分よりも大衆の間により強くアピールする力を持つ部分を構成している用語と言い回しの総計である。アピールする力が弱いために人気を博さない部分は単なる隠語・くずれ語・符丁語として、それぞれの社会に属するより小さい衆団(sub-group)の間にしか通用の能力を持たない。

俗語のこの成立の模様を我々は、Harold Wentworth と Stuart Berg Flexner の 'Dictionary of American Slang' の中に掲げている図表を参考にして探ってみよう。図表の分類の示す集団は俗語の発生する温床の幾つかの主なる種類を示している(実際は辞典の中ではこうした小群を48種に分類している)。

俗語は図表が示しているように、俗語に迄成長する人気を博した用語や言い回しは、大多数の人々によって「良い」とし「正式のもの」として容認されるには至らないが、多数のアメリカ人大衆(large portion of American public)によって理解せられ用いられている種類の言語である。斜線陰部に位置する隠語Cは高校生と10才代の青少年一般を含んだ大群と、大学生大群とが重なり合った部分であり、それは高校生及び10才代青少年の1部と、大学生の1部とが共に用い理解する用語と言い回しの隠語であ



る事を示し、また放射状の基底部即ち円周内俗語の部分には、総ての人間集団によって用いられる用語と言い回しである事を示している。従って俗語と言えどもその中には人気昂揚して教養ある (cultured) 人士の間に迄用いられるように成長し、国民の所謂標準米語・標準談話に加はる資格を獲得するに至るものがあるが、他方ではまたその増大し行く人気を一時的には博しながら、次の時期には早くも忘れ去られてしまうものもある。というのは俗語はその本質上常に新鮮な表現でなければならないからである。従って新陳代謝が盛んに行はれ、結果として俗語の多くは短命である運命を持っている。また第3の種類 of 俗語は、俗語と言える所まで完全に容認される事もなく、そうかと言って完全に忘れ去られてしまう事もなく僅かに周辺俗語の命脈を保つに過ぎない。こういう観点から用語の数個につい

て眺めてみよう。その発生以来米国で最大の人気を博した O. K. (yes ; この語の発生の根拠として最も普通に考えられるものは、1840年の米国の大統領選挙の際、立候補者の1人 Martin Van Buren の愛称 “Old Kinderhook” (ハドソン峡谷の中にある村の名で彼の誕生地) の頭文字で賛成の意を表わしたことに由来する。またアメリカの女流作家 Ann Royall が1840年に述べているように only kissing から来たとするもの、その他がある) とか、jazz (ジャズ音楽 (その狂騒的なテンポで興奮を誘発するという)、起りは1900年よりずっと前から南部黒人の用語で、性交・処女・娼婦という禁句 (taboo) から) という用語や、また A-bomb (原子爆弾) のような用語は最近迄は俗語であるとされていたが、今日では既に標準的用語となっている。ところが blue belly (水色胴体、〔米〕南北戦争当時連邦軍兵士が水色の服を着装していた所から、南部軍が敵側兵士を呼んだ名前)、Lucifer (ルシファー・マッチ (安全マッチ・硫黄マッチ)、発明者 Lucifer の名を取って ‘Lucifer match’ と呼ばれ、1925年頃迄普通に用いられていた) や、the bee’s knees (=the cat’s meow [miáu] にゃあ (猫の泣き声)、素晴しくて注目に値する人・物・計画など (1920年の最も大きい然しほんの一時的な人気のあった言い回し)) など、今日では人気の色もあせて、既に古風な (archaic) 用語として俗語の領域から脱落してしまった。また bones ((賭ばく) さいころ (通常2個1緒に用いる)) や beat it (「逃げる」) は永久に俗語として留まるように思える。と言うのは、Chaucer (Geoffrey ~ (1340? —1400)、英国の詩人、The Canterbury Tales の作者で「英詩の父」と言はれる) は前者を用い、Shakespeare (William ~ (1564—1616)、英国最大の劇作家・詩人) は後者を用いたという長い歴史を持つ用語であるからである。

生きて用いられる語彙はどんな語彙でも、例外なしにそのまま静止的状态 (to be static) を維持することは不可能である。新しく生れ出た俗語的用语や俗語的言い回しは、大部分は極めて自然的な発生過程を持っていた。それ等の用語や言い回しは他の環境と異った特殊な環境から生れ出たものである。新しい物 (objects), 新しい概念 (ideas), 新しい出来事

(happenings) は、それ等を説明するために新しい用語・言い回しを必要とする。新しい世代の人間はまた、同一の古い事物を説明するのに、昔から用いられている用語・言い回しに代って新しい用語・言い回しを必要とするように見える。

鉄道業務従事者達は、鉄道網が広がるに従って彼等の仲間が居る所ではどこでも、謂はば全土的に、やがて用いられて俗語として大手を振って通用する「隠語」や「くずれ語」を作り出し使用した最初の人間小グループ (sub-group) であったようである。彼等鉄道従業員は jerk water town (機関車が水を吸い上げるための施設のある小さな田舎町《1900年より一寸前頃からの鉄道用語、軌道と軌道との間に掘り込んである水槽に貯えられた水をすい上げながら汽関車が走るところから出た用語》) という俗語を造り出したが、その用語は、彼等の小集団に属さない他の人間どもが one horse town (馬一頭おれば総てが間に合うような静かで何事も通常は起らない小さい田舎町《自動車時代以前で、人や物を運ぶ役務は総て馬で間に合った時代》) と呼んだ小社会のことを言葉巧みに描写している言い回しであると考えた。この one horse town が、また別の俗語 wide space (or place) in the road (「小さい町《雑誌 Look 誌に載った記事の標題から生れたもので西部地方人やトラック運転手在使用》) へと変ったり、don't spare the horses (「急げ」) から、step on it (「急げ」《it は自動車を指す》) へ変ってきたのも、自動車が馬に取って代った時代には極めて当然であり、また必要でもあった。自動車はまた、gas buggy (〔1925年以来嘲笑的に、殊に〕ポンコツ自動車《buggy は貨物列車後尾の車掌車》), jalopy (つぶれかかった古自動車, 1949), bent eight (8 汽筒エンジン《高速が出るようにモーターだけ新しくした改造自動車用エンジン》), convertible (たたみ込み式幌の付いた自動車) や, lube (=lubrication 油差し, 1957) のような新しい用語や、新しい意味を担った俗語を生み出した。

自動車の発達はまだ、新しい俗語や新意味内容の俗語を生み出す役を果たした。それは戦争・大量移住・科学や工学と同じように、アメリカの社会

史に迄その影響を及ぼして、次のような俗語を生み出した。dusters (婦人用ダスターコート・塵よけ上衣), hitch hikers (通りがかりの自動車に便乗して、次々にハイキングを続ける人間 (hitch は「ぐいと引く」の意から、肱を曲げた右手を揚げて、親指だけを自分の行先の方向に向けて構える姿勢)) road hogs (他の車を構はずに道路を占領して走る運転者 (hog は豚のように下品に振舞う男)), その他 joint hopping (はしご飲み (1945年以来の学生用語)), necking (首を抱き合っていていちゃつくこと, 1926年学生用語), chicken (=chicken feed, 生活費を丸ごとバクチに賭けてしまうこと), suburbia ([軽蔑] 郊外居住者) など時代世相を表わしている。

自動車は明らかな実例の1つにしか過ぎない。言葉は常に次の新しい用語を作り出して、新しい概念と新しい発展物に応答する。もう少し例を示そう。

戦争に関するもの…jeep (第2次大戦に米国が考案した能率的小型自動車), "GP" (general purpose, 全目的自動車), red coats ((独立戦争当時の) 英兵 (赤い上衣を着装していたことから、米兵が付けた名前)), minute men ((独立戦争当時) 即座に応召出来る準備をしていた民兵), blue belly (前出), over there (北米大陸以外へ出掛けて従軍すること, 1946), doughboy ([米軍] 歩兵部隊の兵士, 1847 (対メキシコ戦争で歩兵は戦闘後キャンプファイヤで麦粉のパンを焼いたことから出た)), Roks (韓国人 (Republic of Korea の頭文字をとったもので、米兵が用いているが軽蔑の意味を含まない), 1950), gooks ((軽蔑) 日本・中国・朝鮮・太平洋諸島などの黄色人種・非基督教徒, 1956 (gook は「汚いもの」)), spaghetti ((軽蔑) イタリア人系アメリカ人, 1941), その他。

食物に関するもの…apple-sauce (からお世辞, 1927), luncheonette (手軽なランチ), hot dog (細長い巻パンに熱いソーセージを挟んだもの, 1900 (もとダクスフントソーセージ即ち粉にひかれた犬の肉で作ったソーセージから出来た用語)), coffee and (ケーキ付コーヒー (軽飲食店のカウンターでお代りを注文する時の言葉)), ham and (=ham and

eggs (同上)), その他。

衣服に関するもの…Sailor (=sailor blouse セーラー服), Shimmy ([口語・小児語] =Shimise [ʃimí:z] シミーズ《婦人用肌着, 今は旧式服で, 代わりに slip を用いる》, 1952), Zoot Suit (ズート服《膝まで届く肩巾の広い長上衣》と, 多数のボタンを付けてすそだけを細めにし, 上部をだぶだぶにした長いズボンとから成る突飛な恰好の衣服《この語の音調とズート服の恰好と両方が1930~40年頃の流行のスウィング音楽的性格を連想させた》), Long Johns (丈の長い毛織の下着《Long John が背の高いやせたひょろ長い男を指し, 屢々あだ名に用いられたことから出た用語》), その他。

住居に関するもの…W. C. (water closet の頭文字をとったもの《toilette は chambre de toilette の短縮形で, カナダのフランス人の入植地域で用いている用語》), Sectional (組立て式家屋及び家具《車庫・ソファ・本棚等》), lean-to ([pl. —tos] 屋根が傾斜して壁に寄りかかった構造の家屋), railroad flat (=railroad apartment, 《日本の列車の寝台車のように内部に1列に並んだ小室があり, 部屋の1部分が通路代りに使われているような》平屋建下層階級アパート), その他。

音楽に関するもの…long hair (作曲演奏家・古典音楽愛好家), bandwagon (サーカス宣伝隊に加はる音楽隊を乗せて回る時用いる通常飾り立てた背の高い無蓋四輪馬車), rock (《金剛石など切りとる時などに出る》極度に緻密な硬い音), その他。

人などの性格に関するもの…Yankee (従来 New England Yankees の持つとされている鋭敏さ (shrewdness), 慎しみ (reserve) もしくは機械を発明する才能 (mechanical ingenuity) を備え持った), alligator ([わに] 身体頑強で大酒豪の西部の狩猟者《「水陸両用戦車」はアメリカ海兵の用語》), flapper (身持ちの悪い自堕落な若い女), beetle (差しでがましい《beetle [かぶと虫] <L. bite, まゆ毛が突き出て, しがめつつらした》), B. M. O. C. (〈big man on campus (大学の構内で麻薬を非合法的大量密売をする一味の親分), hepcat ([最近の] 事情

にとてつもなく明るい人間), beat ((beat の p. p. から) 疲れ切った), sheik (女たらし; sheik は《回教国特にアラビアで》族長), その他。

新運輸機関に関するもの…jet jockey (ジェット機のように速い騎手《専門の競馬の》), hot shot ((《貨物運送業者などの》急行便), stage (乗合馬車《stage coach の馬の仕立場所の意から》), pinto ([píntou] [米西部] まだら馬《スペイン語 pinto=painted から》), jitney ([dʒítni] 乗合バス (=jitney-bus, もと乗合バスは料金が5セント (jitney) だったことから)), その他。

新演芸に関するもの…barnstormer ((主に田舎で不定期に) 遊覧飛行や曲乗り飛行をやって生活する人《もとは納屋などを舞台にして芝居などをやる旅役者》, (stormer は, あばれ者, どなる人の意)), two-a-day (=big time 《劇場など》一流の《大都市の一流劇場では1日に2回通じてヴォウダビル〔音楽や舞踊やアクロバット入り軽喜歌劇〕を演出したことから)), talkies ((《廃語》発声映画(事業)《画像線に対し複線をなした発声線が新奇物であった当時の》)), spectacular(《カラー放送で多数有名芸能人を呼びものとする長時間》豪華番組, 1955), clown alley (曲馬団の道化師などが寝起きしたり出演の身支度をするに使う大型馬車の中央部通路《巡業中テントを張って泊ることは過去のこと》, 1956), d. j. (=deejay=disc jokey; ディスク・ジョキー《軽い話題・広告放送などを挟んだレコード音楽の番組を担当するアナウンサー》, 1945《disc は円盤, jockey は競馬の騎手やヨットレースの操縦士など》), その他。

性観念の変化に関するもの…fast (道德観念のなく放埒な, 1920), broad (売春婦《broad は, 露骨な》), wolf (色魔), jailbait (男が牢獄入りするまでの悪事を犯させるような法定年齢以下のみだらな女, 1930), sixty-nine ((《禁句》)=simultaneous cunnilingus (=licking of valva) and fellatio (=sucking) 大陰唇を同時に嘗めたり吸ったりすること), fifty [forty]-four (売春婦 (=whore) (four が whore と押韻する語であるところから), その他。

人間的動機付けに関するもの…gold digger (財産目当てで妾になった

女, 1925), Momism (母親研修会), Oedipus complex (3才~6才の男児が自分の母親に対して起こす性的欲情で, 父親から来る返報を恐れて圧えている感情 (Oedipus イーデパス; [古代ギリシャ物語] ギリシャの首都テーベの英雄で, 父を殺して母と結婚したという)), do-gooder ([軽蔑] 空想的 (社会) 改良家, 1945), sick (精神的治療を要する, 病的な; "sick" joke, 1955), その他。

個人的関係に関するもの…kids (家族の子供や青少年), old lady (自分の妻 (軽蔑的でなく), 1934), ex (=ex-wife (先妻) または ex-husband (先夫); "Her ex", 1952), gruesome twosome (別の異性と date しない恋人同志 (gruesome は韻の上から付加された語), 1940), steady (心に決めた恋人で date の相手, 1950), John (身を許している恋人 (男); "her John", 1945), bunky (=bunkie 男同志の同室仲間, 第1次大戦兵士用語), その他。

仕事と労働者に関するもの…scab (ストライキに参加しない労組員, 1956), white collar (工場労働者に対し, 事務職員), company man (被雇用者仲間よりも雇用者に忠誠を尽す事務職員), graveyard shift (深夜または早朝の勤務交替 (graveyard は墓場から転じて陰気な暗い場所)), その他。

政治に関するもの…Tory (保守主義者, 保守党员), do-nothing ([adj] 庶民のための社会改革に率先する事をいやがり現状で満足するような), mug-wump ([fr. mogki=great+omp=man] 決断力不足から政治などの問題で中立態度をとる人間), third party ([政治] 共和党にも民主党にも属さず, 時に小数グループの党员が結成する政党), brain trust (頭脳委員会, [非公式] 専門委員会, 顧問団), fellow traveler (どんな思想・運動・集団にも賛成の意を表わすが率先垂範しない人間), Veep (〈Vice President (副大統領); 副議長, 副総裁), その他。

髪型に関するもの…bun ([《干しぶどう入りの》] 甘パン状の束髪), rat ([《rat 髪束》] 髪のを大きく見せるために髪束を入れたり櫛で髪を膨ましたりする結い上げ型), peroxide blonde (過酸化水素の金粉を髪に振り

掛けた女), Italian cut (小さい毛のリングを額・頬骨・耳などの上からあしらった髪型), Pony tail (髪を後で結んで小馬の尻尾のように垂らして結い上げた髪型), D. A. ('duck's ass' の省略語; (ass=nose); 10才代少年の髪型で、髪を長く頭部の左右から櫛でなで下ろして襟首の所で重ね合はせて、あひるが両翼を尻尾の所でたたんだ姿に似せたもの), その他。

学生用語…slow coach (『のろい馬車』劣等生, 1850頃), melted (でい酔した), shoot someone down (人を出し抜く), shades (サングラス, 1955), savage (『野蛮な』最優等の, 1956), bugs (『かぶと虫』生物学), quiz (小試験『大学』), ride a pony (『小馬に乗る』試験でカンニングをする, 『廃語』), その他。

新しい事物に最初に出会い、新しい環境を切り抜け、頭に新しい概念を抱いて働く人間どもは、一般人グループよりも遙かに早い時期に於て新しい用語を案出しそれを使用する。1つの人間集団の用いている用語の数が多ければ多い程、より創造的であればある程、また描写力に優れていればいる程、その人間集団の案出した特殊語彙が、他の人間集団の採用する所となり俗語として貢献する度合いはそれだけ高くなるという事はある事である。俗語を生み出すための条件は、その人間集団が非常に大きくて、然も優勢な文化と連繋を保持するような集団であるか、さもなければその集団が非常に小さくて、一般人から遠く遊離していて、優勢な文化とは縁が遠いために高度な個性を持ち、高度な描写力を備えた語彙を生み出すことの出来るような性格を持つ人間集団であるかの何れかであるということである。10才代の青少年は多数の用語を生み出す事の出来る1つの大きな集団の例であり、また犯罪人や巡業サーカス従業人や、ルンペン、小さい方の集団の例である。小さい方の集団は、彼等の用いる語彙が個人性が強く、自分が指示する事物を聞手の眼前に直ちにありありと示す描写力に富んでいるので、集団としては小さいけれども俗語として他の集団人に用いられるようになる力は却って大きいと言える。

アメリカ人の個人の所有する語彙の数は1万～2万語だと言われる。勿

論この分量は、その意味をその個人は知ってはいるが、実際には一度も使用した事のない語彙を含めた数である。そしてそのうち内輪に見積って2千語は俗語であると言ってよい。こうゆう訳でアメリカ人のそれぞれが知っている語彙の約10%は俗語であり、それはその個人が最も頻繁に使用する語彙を構成する重要な部分をなす。

英語は今日では少くとも60万の語彙を持つと見積られている。この数は Elizabeth 朝時代 (Queen Elizabeth; 在位1558—1603) に記録に載った14万語彙の4倍以上に当る。従って当時から今日まで400年間に45万以上の語彙と意味とが付加された訳である。それも Shakespeare 以後に於て、旧語に入れ代った新語と、忘れ去られた廃語との数を勘定から除外しての話である。今日のアメリカ英語には約1万の俗語と3万5千の隠語・くずれ語・符丁語があると言われる。

国の持つ人口、土地の面積、標準語の語彙数を考慮に入れた上で、合衆国が他の何れの国よりも多数の俗語を持っているかどうかは詳らかでない。恐らくフランス人やスペイン人は、とてつもなく巨大な数の俗語を持ち、その恩恵に浴していることは確かである。けれどもアメリカ人は他の如何なる国民にも劣らず、彼等の間に通用する一般的俗語を頻繁に使用していることは事実である。ところでこのような俗語を生み出すに至ったアメリカ的苗床とは、どうゆう性格のものだったか、俗語の成長を促す營養素となったものはどうゆうものだったろうか。

Ⅲ 俗語成立のアメリカ的温床と俗語の生命

アメリカの俗語は、それを造り出し、育て上げた人々の種類を反映している。アメリカの俗語が多様であり、国民に人気があるのは、アメリカ人が想像力に富み自己確信に満ち、物を見るに楽観的性格を持つ国民であるという事が1つの理由をなしている。俗語が生れ出てアメリカで活躍する事が出来るのは、主としてアメリカ人が一定の型に捕われない話し方 (free speech) を易々諾々と承認する雅量を持つという事が、もう1つの、然し

ながら、もっと重要な理由である。この事は、とは言へ、逆にアメリカでは言語に対して、一方では国民全体が学究性 (academy of language) を欠いており、他方ではアメリカ政府諸機関の側に於て、アメリカ英語を純潔なものに育てようとする (purify) 企画と努力とを欠いている事を示している、と言えよう。

アメリカ人は気ぜわしい (restless) 人間で、地域から地域へと生活の場を変へ、仕事から仕事へと移り住む。先駆者の時代から、西部へ向っての拡大移動の時代を経て、現代アメリカ人の移動性 (modern mobility) の時代に至る迄、このような楽観主義放浪欲 (hopeful wanderlust) は、広地域的・人間集団的特有な俗語 (legional slang) を、他の地域、他の人間集団の間へも広く伝播させて、広く認容された広広地域的・一般的俗語 (general slang) に成長させる事に協力した。数個の東部工業地域と、南部と西部にある若干の人里離れた地域とを除いて、「アメリカ」(America) という名の国土は、まさしく「永く住み着く定住地」(“lived in”) であるとも思へないし、その名もまたそのような語韻を持つ用語であるとも思えない。

アメリカ人の話す言葉も、丁度彼等がその地域へ旅行の途次ふと訪れたかのような、あるいは単に視察にでも来たかのような語法を持つ。単に何処にでもある極く普通の事物も、彼等にとっては、何か新しい、他に類似物のない、色彩の鮮やかな物として目に映り、新しい用語、力のある言い回しを使って叙述する価値のある物として目に映る。人間そのものも彼等の仕事に、彼等の町に、彼等の用語 (Vocabularies) に「定住する」(“settle down”) する事を知らない民族であると言ってよい。

とはいえ、総ての新語や新しい言い回しが悉く、所謂俗語 (slang) として成長する訳ではない。それ所か、隠語・くずれ語・符丁語の大部分は、俗語にまで成長する以前に、小地域、小集団の中だけにしか通用しない短命なものとしてその命脉を断っている。その当の隠語・くずれ語・符丁語でさえも、そしてそれを生み出した集団が極めて小さい人間集団であっても、誕生した新語・言い回しのうちで集団に受け入れられるのは極めて

少ない。受け入れられるまでに命を持ちこたえるものは、まさに例外的な高度の利発性と有用性を発揮するもののみである。生き残ってその小集団に認められた少数の用語・言い回しは、若し他の集団の人間にも有用なものと判明した暁には将来俗語にまで成長する過程を辿ることになる。テレビ、ラジオ、映画、或いは新聞などマスコミの手段によってこれ等の用語は、もっと優勢で支配的な文化の中へ紹介されると、今度は加速度的に迅速に一般的用語としての資格を獲得するに至る。即ち極めて小集団の俗語が、次に他の集団の俗語として採用され、やがて多数の集団の認容する一般的俗語へと成長する過程を経る。

とは言へ、原始的民族 (primitive people) は、どの民族も、俗語と見做し得るものを殆んど持っていない。何故ならば彼等の生活様式は慣行観念によって制限されており、彼等には新しい概念も生れて来ないし、優勢な他の文化と交流を持つこともしないからである。《北米土人などの》まじない医者 (medicine man) や、魔法使い仲間のような集団は彼等自身の語彙を持てはいるが、それは1種の永久の隠語 (cant) でしかない。彼等にとっては彼等の用語は秘語 (secret) であり聖語 (sacred) であるので、それが他の集団によって理解される事を拒否するからである。

Ⅳ 俗語の持つ特性 (advantages that slang possesses)

a. 俗語は短刀直入性を持つ

日常談話の際に、我々が同類の他の語よりも優先して或る特定の語を選び出して用いる事が屢々ある。然しそういう場合でも或る意図を持って選ぶというよりも寧ろ、単に日常の習慣からそうするだけである場合が多い。但しある場合には日常使用している標準的用語をわざと避けて、意識的に俗語の方を選んで用いる事がある。その理由は、そういう場合の我々の意識が、その俗語を用いる方が却って迅速に (more quickly), かつもっと

易々と (more easily), またもっと個人性を付けて (more personally) 自分の思う事を相手に伝える事が出来ると信ずるからである。

例えば既に1940年代になった時代には, WAC ([米俗] 陸軍婦人部隊(員)), cold war ([米俗] 冷戦(武力外交・経済圧迫などを指し, hot war 即ち本格的武力戦と区別したもの)), cool (軟かい調子を特長とするジャズ音楽の一種) などの意味内容は, 標準英語の Women's Army Corps や a form and style of jazz characterized by soft tones などの表現を以てしては, とても迅速には表わし得ないであろう。俗語はまた屢々, 標準的言い方 (standard usages) より表現力に満ち (forceful) 鮮明で (vivid) 感情や意味内容を豊かに表わし得る。また古い標準語がともすると聞手に与える感傷と堅苦しさを持っているに対し, 俗語は屢々用語の明るさ軽快さを持つ (avoid sentimentality)。例えば taking a girl to a dance という標準的言い方では形式的で堅苦しい気分を持った仮装舞踊会や, 最上の晴着を身につけて腰や肩に小さい花束をあしらった女性の姿を連想させてしまう。これを俗語をずばり使って go to a 'hop' と言った方が迅速で明るい気分が出る。penniless (無一文の) と言うよりも, without a hog in one's jeans (hog=one dollar : jeans=trousers (ズボン)) という俗語的表現を使った方が描写力に勝るであろう。標準語の lawyer (弁護士) よりも, 俗語で legal beagle (法律のビーグル犬(兎狩り用の小猟犬)) と言うか, または mouthpiece (送話口) と言う方が内容が分り易いし, clerk (事務員) と言うよりも, 俗語の pencil pusher (鉛筆を押し回す人間) の方が, 同様に surgeon (外科医) よりも bone-breaker (骨切り師) の方が, また cemetery (墓地) と言うよりも bone-yard (骨の園) と言う方が, また laboratory assistant (実験室助手) よりも bottle-washer (ビン洗い) の方が描写力に勝るであろう。逆にこれ等のものを別の標準用語を用いて, legal council (法律顧問), junior executive (下級行政官), doctor (医師), necropolis (or memorial park 墓地), laboratory technician (実験室技士) などと言えは, 用語のゴロだけでも, いかめしくて近付きにくい思いがするで

あろう。

b. 俗語は多数の用法を持ち万能性を発揮する

Wentworth の「アメリカ俗語辞典」は、次に掲げるアメリカ英語の俗語は、同一語で多数の用法を抱いているという特長を備え持ったもので、しかも俗語のうちでも最も頻繁に用いられるものであると言う。眺めてみよう。bug (昆虫) が「熱狂家」, 「《軽蔑》おえらがた」, 「売春婦」など30個もの意味を表わし, shot (弾丸) が「モルヒネ注射」, 「強酒のひとくち」, 「スナップ写真の1枚」など14個の名詞的意味と4個の形容詞的意味を表わす。can (ブリキ缶) が「1ドル (貨幣)」, 「便所」, 「《特に男の》臀部」, 「《学生を》放校処分にする」など11個の名詞的用法と6個の動詞的用法を持ち, bust (上半身) が「《げんこつ》の強打」, 「破産」, 「破裂する」, 「《野生の馬など》飼いならす」, 「《試験に》落第する」など6個の名詞的用法と9個の動詞的用法を持つ。hook (鉤) は「いかり」, 「売春婦」, 「ごろつき」のような8個の名詞的意味と, 「盗む」, 「捕ばくする」, 「魔薬に耽る」など5個の動詞的用法と, fish (魚) に「新参者」, 「とんまな人間」, 「カトリック教の牧師」など14個の名詞的用法と, 「人にへつらう」, 「《拳闘など》打つふりをする」など3個の動詞的用法があり, sack (袋) が, 「仕事からの解雇」, 「《野球》塁」, 「寝床」など8個の名詞的用法と, 「《軍隊用語》睡眠の《sack drill 睡眠時間》」という1個の形容詞用法と, 「追放する」という1個の動詞的用法を持っている。従って1個1個の俗語はその俗語が表わすいろいろな意味のうち, 現在時に生きて用いられている意味内容に従って用いられる限りに於ては, その場のその時の環境に応じて殆んど万能的に持ち前の威力を発揮するのが俗語であると言える。

c. 俗語は単節語であること・破裂音・氣息音を持つことを好む

標準的用語は多音節愛好癖 (polysyllabicity) を持つ人間には好まれるが, 俗語はちがう。俗語は時には簡潔 (brevity) であるという理由からばかりでなく, その簡潔性こそが俗語をして表現力に満ちた (forceful) ものとさせているという理由で好んで用いられる。眺めてみると俗語はどう

やら、短い用語 (short words) を、中でも特に単音節 (monosyllables) を好み、その上俗語が最も効果的であるために、破裂音 ([p, b, t, d, k, g] など) や、氣息音 ([h]) で始まる用語を好むようである。

Wentworth と Flexner の「俗語辞典」の「はしがき」に従えば、単節語は彼等が文学作品から引用した俗語用法の実例のうちで最大多数のものを構成しており、またその多くは破裂音・氣息音を語頭に持つ。同じ「はしがき」によれば、最大数の引用例を掲げた40語の俗語のうち、29語が単節語である。次の単節語は何れも数種に及ぶ俗語的用法を持っているが、その論証に用いられた原作品からの引用例はそれぞれ下に示す数に達しているという。fink (職業的スト破り) は70個の引用例を、hot ((ジャズ音楽が) 興奮的な) が67個、bug (熱狂家) が62個、blow (狂乱) と dog (ホットドッグ) がそれぞれ60個、joint (ひと揃いの麻薬注射器) が59個、stiff (酔っぱらった) が56個、punk (ちっぽけな愚連隊) が53個、bum (痛飲) と egg ((男) 人、やつ) がそれぞれ50個、guy ([gai] 人、やつ) が43個、make (盗む) が41個、bull (煙草) と mug (顔) とがそれぞれ37個、bird (けた外れの人間・動物・物) が34個、fish (新参者) と hit (優秀な成績で試験に合格する) とがそれぞれ30個、ham (演技が過大な人) が25個、yak (信用のおける仲間) が23個、sharp (ペテンに掛ける) が14個、cinch ([sɪntʃ] 《全く》確かなこと) が10個であるという。(注…上に掲げた各語の意味内容はその語の俗語用法のうちの1つを示したに過ぎない)。

d. 俗語は男が造る

アメリカ英語の俗語は大部分は男 (males) によって造られ男によって使用されるのが普通である。禁句 (taboo)・聞手の名誉や品位を損傷するように働く種類の俗語や、ひどく墮落した行為・性・女性・仕事・金銭・ウィスキー・政治・運輸・スポーツのような事物に関するいろいろな種類の俗語は、主に男の努力と興味とに言及したものが多い。従って俗語の多くは、その使用例の説明に当っては、「主に男性用語」("primarily

masculine use”) という見出しを付けてよい。男は女よりも数多くの小集団に所属している。男は職業上の隠語やくずれ語を製作して使用する。女は今日でもなお家族人同志の、または近隣人社会とのつき合いしか持たない者が多い。従って女は新しい俗語の発生源の領域にその生活の場を持っていない。婦人の衣服・髪型・家庭や炊事室の器具類や新案小道具類を指す新しい用語でさえ男が造ったものが多い。俗語を造る下地があって女が所属する小集団を探してみても、やっと航空機のスチアデス、美容室勤務者、合唱団のメンバー、看護婦、売春婦とレストランの女子従業員の集団位のものしかない。

男と女との間では用いる語彙に違いがある。男は女性韻を持つ用語 (feminine rhyme, 2 音節または 3 音節の押韻で、アクセントのある音節のあとで弱い 1 音節または 2 音節で終るもの; 例: *nótion*, *mótion*: *láziness*, *háziness*) を避けて用いない傾向がある。標準的語彙の場合でもこのような性別が認められる。女は夫に食卓の準備を頼む際には *silver* ([*sílvə*] ナイフ・フォーク・スプーン), *crystal* ([*krístəl*] コップ), *china* ([*tʃáinə*] お皿) を出して下さいと言うであろうが、夫は *knives*, *forks*, *spoons*, *glasses*, *dishes* を食卓に載せるであろう。妻は *table linen* (食卓かけ) が魅力的であると思い、夫は *tablecloth*, *napkins* の方が美しいと思う。夫は妻に *pocketbook* (《婦人用》財布) を贈物として買ってやるが妻は *bag* を貰うであろう。夫婦は同じ屋根の下で、彼女は *home* の中に住み、夫は彼の *house* の中に住むであろう。

〔注〕「押韻する」とは、2 つ以上の語 (または 2 つの詩行の末尾) で、強勢 (アクセント) ある母音が互に等しく、かつそれ続く子音 (または子音と母音) も互に等しく、強勢のある母音の前に来る子音を異にすること。例えば *cat* と *mat*; *day* と *play* のように。なお前記「女性韻」に対し、「男性韻」(masculine rhyme) とは、例えば *disdáin* と *compláin* のように最後の 1 音節のみ押韻するもの。

そしてひとたび家庭の外に出ると、男は女より先に俗語を使いだす。女が *car* に乗り込むのに、男は *jalopy* ([*pʒəlɔ́pi*] ぼろ自動車, 1949) か *Chevvie* (*chevrolet* [*ʃévrəlei*] 〔商標〕シボレー米国製大衆車) に乗る

であろう。そのようにして夫婦は出掛けて行く。彼女は夫から彼女がやがて用いる俗語を学び取る。彼女が自分の家庭・自分の所有物・女性だけが持つ個人的な意識を連想させる用語を用いるに対し、夫は特殊の家庭・特定人の所有物・一方の性の人間だけしか持たない種類の意識とは関係なく、もっと一般的で、脱個人的なものを連想させる用語を使う。

男性は驚く程に俗語を作り俗語を用いる。殊に讃美・喜び・軽蔑・怒りの感情を表わす用語に多い。生活状態の急速な変化がそのような感情の起動因となっている。それ等の激しい感情は、もはや従来 of 標準用語を用いては表現し得ないものとなってしまうている。その瞬間の精神的襟張の状態を言い表わすのに、男は標準的用语の 'untenable position' (「支え切れない状態」) では我慢し切れなくなっている。彼はその時既に 'up the creek' (「窮地に陥って」, 1939) の状態になってしまうている。激怒の下では、別人なら単に標準語の 'incompetent' (「不適任な」) で間に合う所だが、いつの間にか、'jerk' (〔俗〕「とんま・まぬけ」, か 'fuck-off' (〔俗〕「何をやらせても失敗する人間」, 第2次大戦時の陸軍兵の用語) と罵声を浴びせかけないではおれなくなってしまうている。

人は何故に slangy な表現を発達させるか。その動機は多様であるが、その主なるものは、正規の語句が既に陳腐に感じられ、それによって満足し得ない若い元気な心が、humor を求めたり propriety (正常) に反抗したりする気分、新奇を鼻にかけ人を驚かそうとする意図、如実な表現を用いて具体性を強めようとする欲望、或いは会話を平易なものにし親愛の度を増そうとする目的などであろう。このような心の動機に促がされて、人は普通の語を異状な意味に使用したり、異状な語句に平凡な意味を持たせたり、新奇な譬喩法で新しい句を鑄造したりする。

標準語にせよ俗語にせよ、人が言葉を用いて事物を相手の人間に伝えようとする場合、或る技巧を用いることによって、描写を生かしたり感銘を深からしめることがある。その技巧とは、その物、その事をありのままに述べる代りに、他の物、他の事になぞらえて述べる述べ方で、これを「比喩」という。

e. 俗語は隠喩である

「比喩」には「直喩」(simile [símili]) と「隠喩・暗喩」(metaphor) との2種がある。「直喩」は A is as—as (or like) B の形式をとり、一般に数語から成り比較的長い構成形体を持っている。例えば In the morning they are *like* grass which groweth up. (Psal. xc. 5) ; A *marble* brow (= a brow as white as *marble*, 大理石のようになめらかな白いひたい) ; the *ocean* of life (人生という大海原) ; All nature *smiled*. The ship spread its *wings* to the breeze. (船は風に向ってその翼をひろげた) ; as busy as a bee (せっせと精を出して) などのように。一方「隠喩」は通常 A is B. のように、Bの属性を直接的にAに移して叙述する。即ち「直喩」を縮約して、抽象的なものを述べるのに具体的な事物を指す用語を使って述べる言い方である。例えば bee (《蜜蜂》仕事と娯楽のための隣人友人同志の寄り合い) ; bee-hive (《蜂の巣》人混みの場所) のようなものがそれである。

隠喩は概して単一語もしくは短かい構成形体を持っていると言える。till the cows come home (気長に) ; a snake in the grass (見えざる危険) ; split hairs (重箱の隅を楊枝でほじくる) ; cool one's heels (長く待たれる) ; a square peg in a round hole (不適材不適所, 場はずれ) ; have no stone unturned (草の根を分けて探す) ; make both ends meet (収支を合わせる) ; be in deep waters (抜き差しならん破目に陥る) ; burn the candle at both ends (精力, 財力などを浪費する) など隠喩の例である。Harold Wentworth の「アメリカ俗語辞典」は, middle leg (《禁句》陰茎), money-bag (金持ち), moonshine (密造ウィスキー), frogman (潜水夫), nose (警察の雇われスパイ), kisser (口), sugar report (兵士に宛てた愛人からの手紙), soup-and-fish (男の公式夜会服・タキシード), fish (魚雷), などなど茫大な数に上る俗語とその用例とを掲げている。

俗語こそはこの A is B の隠喩を用いて、抽象的な意味内容のAを、具

象的な事物Bに置き換えて伝達表現する様式の言語現象の代表的なものだと言える。言語には高級下級の各種の用語や言い回しがあるとする説を、一応認める立場に立てば、標準語はその最も高級なものであるが、どのような水準の用語の場合でも、そして基本的な隠喩は、とりわけ、人間の持つ五つの感覚 (five senses) にその基礎を持つものである。

f. 俗語は人間の五感にその基礎を持つ

という扱で、rough (《ざらざらした》不愉快な《第2次大戦後》), smooth (《なめらかな》感じのよい, 1942), touch (友達から金を借りること, わいろ, 1930), prune ([pru:n] 《乾しすもも》物笑いになる人物, 1950), sour-puss (《酸っぱい猫》人づきのしない人間, いやな顔付の人間, 1947), sweet (ジャズの踊子のからだつきを賞味出来る臀部, 1958), fishy (《目が》魚の目のようにどんよりした, 《話が》怪しい, 1899), P. U. (悪臭を嗅いだ時に口から出る「ピュー (pew) という発声), rotten egg (うんざりした), blow (法螺を吹く), loud (派手な, けばけばしい), blue (打ち沈んだ), red (《国際共産運動が用いた赤旗から》共産主義者, 1940 ; 《決損金を赤インキで記入することから》財政上の赤字), square (《趣味などの》堅苦しい) などは、人間の五感に関して作られた隠語であり、同時に俗語であって、これ等は数多い俗語のほんの2, 3の例にしか過ぎない。

俗語として用いられている隠喩は、人間の五つの感覚のうちでも、温度に対する皮膚の感覚を含めて触覚と味覚に関連して作られたものが最も多い。そのうちでも味覚を先づ第一とする。というのは味覚こそは、視覚・嗅覚・触覚・聴覚の総てに緊密に関連しているからである。従ってそれは食物 (food) の隠喩的俗語として最高の人気を獲得している。農場・台所・食卓で人の目に触れる食料品の形状・色彩・味わいは、そのまま俗語として用語の上に乗り移っている。食物の名前は、人がどのような小集団に所属していようとも、共通した心像を相手の脳裏に直ちに起させるものである。男は食物を生活必需品として世間に供給する仕事に従事し、女はそれ

を購入し、調理する。男も女も1日に少くとも三度は五感を以てそれに接触する。

多数の食物用語は、俗語としてお金 (money) を指すのに用いられている。cabbage, (キャベツ) kale ((ちりめんキャベツ), 1939), lettuce ((ちさ), 1946), sugar などがそれである。

食物用語はまた人間の「身体の部分」を指す俗語として用いられる。cabbage ([禁句] 女性生殖器 (黒人用語)), head ((キャベツの結状) [禁句] 直立した陰茎), potato (頭), fish hooks ((魚釣針) 手の指), meat hooks (にぎりこぶし), meat bag (胃袋), nuts (人間の頭部, 1930), plates of meat ((肉乗せ皿) 脚) などがある。

食物用語はまた人を指す俗語として用いられる。apple (やつ (奴); 通常形容詞を前に付けて, smooth apple (自分が生きな人間だと思っている人間)), cold fish (内気な人間), frog ((食用蛙) 声変りした青年), frog eater (フランス人), fruit-cake (同性愛に狂った人間), honey (愛人 (通常は女性)), sweetie pie (器量のよいおでしゃ娘), cold meat (死人) など, その他がある。

飲食に関連した他の標準的用語もまた、一般的環境や、一般的姿勢や、態度を示す俗語として用いられる。brew (醸酵させる) が, to brew a pot (暮しを立てる) と言い, chew out ((徹底的に噛む) 厳罰に処する (第2次大戦)) と言い, to find oneself in a pickle ((漬け物) 苦境に立つ) と言い, kosher ([kóʃər] (食物が) 衛生上適法な) を用いて, to find oneself in something *not kosher* (汚れた環境の中にいる) と言い, swallow ((飲み込む) わなにかかる) と言ったり, to ask what's cooking? (何が起っているのかと尋ねる) と言ったりする。boiled, stewed, fried, pickled などの用語は「酔っぱらった」を意味する俗語であり, apple-sauce (1937), banana oil は「たわごと」の意味で, spinach ([spínɪtʃ] ほうれん草) は屢々嘲笑用の俗語 (1933) として用いられる。

食物用語はまた、禁句 (taboo) としてであるが、性に関する俗語とし

て働いている。多数の寝室用語 (bedroom words) は学術上から言えば決して俗語ではなく、完全な標準語であるが、人が避けて用いる事を慎しむという理由だけで、俗語であると連想されているに過ぎない。とは言えこの種の用語の多くは禁句として、用いる事を慎しんだ時代に担っていた意味内容がいつの間にか忘れられて、もう一步移り変った別の意味内容を担って俗語として用いられるに至った。例えば fuck はもと禁句として「性交、殊に手淫」を隠喩して禁句として慎しまれたが、後に単に「だます・騙る」の意味を担って第2次大戦中、兵士や学生の中に俗語として大いに人気を博した。また jerk はもと禁句として「手淫癖の人間」を隠喩していたが、後に「《軽蔑》無愛想でとんまな人間」の意味を持つ俗語として友人間に却って親しみ表わすに用いられるに至っている。jerk はまた感嘆詞として「こん畜生 (=Damn you!)」の意味で女から男への仕返への感情の「拒絶を表わす発声」の俗語として用いられている。screw you (〔禁句〕感嘆詞 = fuck you! 《くそ食え/強い拒絶》) は、もとは、禁句の to screw (性交を行う) から来たものである事は今日では忘却されている。

多くの食品名が金銭、身体の部分、人間の種類、性に関する事柄を指す俗語として用いられている事は、食物は人間にとっては単なる食物以上のものであることを示している。A good egg brings home the bacon to his honey. (亭主は愛する女房のために生活上の必需品を買う金を稼ぐ) (〔註〕egg 人間 (男); bacon (盗賊用語) 略奪品; bring home the bacon = earn money with which to buy the necessities of life; honey 愛人) のような俗語ばかりを用いた表現では、食料品の心像は既に農場、台所、食卓からは遙かに遠くへ離れ去り、その姿を隠してしまっている。また A string bean of a sugar daddy takes his piece of a barbecue out to get fried with his hard-earned kale. (背の高い痩せた中年の金持紳士が情婦を連れ出て、彼が精出して儲けた金で酔いどれるまで酒をもてなす) (〔註〕a string bean of やせて背の高い; sugar daddy 妾を養っている金持中年紳士; piece 〔禁句〕 = vagina [vədʒaɪnə])

腔；barbecue 情欲をそそるような若い女，1925，黒人用語；fried 酔っぱらって；kale お金，1936）のように喋る時にも食物の心像は既にある。

けれども性と食物とは無意識的に緊密に結びついている。従って食品を指す多くの標準的用語は，性に関する事物を述べる俗語の禁句として，用いる事を慎まれている。性は総ての小集団の人間が共通して持つ主要な感覚であるからである。banana（陰茎，性交），bread（女性生殖器），cheese cake（つやっぼい女，女の脚部の美しくさを強調した写真など），cherry（処女性，処女膜），jelly roll（《ゼリー入渦巻ケーキ》一般的に性行為，黒人用語），meat（《貝，卵，果実などの実〔み〕》子宮）その他がある。また食物の名は愛人または性的魅力のある人間を指すのに用いられて，cookie（《クッキー〔一種のビスケット〕，（呼び掛けに用いて）少女，恋人），honey（《通例夫婦・愛人の間で用いる呼び掛け語》，my honey ねえおまえ），peach（《桃》若い美人，みずみずしい少女），quail（《kweil》《アメリカうずら》性的魅力のある若い女），tomato（肉体美を持つ女）などの隠喩的俗語を作っている。

g. 俗語は卑俗な語法ではない

俗語は，それが標準的（standard）な言語でもなく，公式な（formal）言語でも，或いは総ての環境の中で認容される事の出来る（acceptable）種類の言語でもないという理由から，それは卑俗（vulgar）であり，無作法（impolite）なものであり，粗野な（boorish〔búerif〕）言語であると通常は考えられている。

然しながら多数の俗語や俗語的言い回しは，禁句（taboo）でも下品（vulgar）でもなく，墮落した（derogatory）ものでもない。またそれが担っている意味内容に於ても，音声に於ても，それが相手の頭の中に引起す心像に於ても不快な（offensive）ものでは決してない。単にその用語に「俗語」（“slang”）というレッテルが辞書の中で貼られているという理由だけで，それを用いる事を慎む理由は何処にも無い。その用語が明快に役に立つものである場合には尚更である。

今日のアメリカ英語は、過去の時代の「純正英語」(King's English) や、ラテン語、ギリシャ語、或いは「バベルの塔以前の言葉」(pre-Tower of Babel tongue ; 2300 B. C. 頃) などが、過去のある時代に腐敗してそこから生じて来たという言語ではない。地球に住む人間の言語はどの言語でも、伝達という目的を以て、人間集団の中で人間がそれに同意を与えた慣習でしかなかった。この事は過去の言語でも、現在の言語でもまた将来用いられるであろう言語でも同じ事である。1607年 John Smith の率いる英国人移民集団および旧大陸の各地からの移民集団が新天地に入植して以来行なわれているアメリカ俗語についても同じことが言える。

「隠語」(cant) と称し、「くずれ語」(jargon) と称する用語としてもまた、「望ましくない」(undesirable) 用語、下層社会や、どや街(underworld) に住む人間どもの用語だけを指している訳では決してない。従って「俗語」と言えども、下層社会の麻薬常用者、変質者、ヒッピー族などの人間種族の巣窟から出発したものばかりではない。教養ある人間の小集団も始めはそれ自身の個人的隠語、くずれ語を作り出す仕事に参加もしたし、その隠語、くずれ語がまた他の人間集団の中で認容されて、やがて広い領域に流通する所謂俗語となっているものも多い。総てのアメリカ人は、それぞれの小集団に所属し、然も1個だけの集団ではなく、数個の人間集団に同時に所属するものである。10代の若者、鉄工労働者、兵士、南部住民、麻薬常用者、規則正しく神の礼拝に出席する人間、トラック運転者、広告業者、ジャズ音楽士、掏摸(すり)、あらゆる分野に亘る小売商人、ゴルフの愛好者、総ての国々からの移住民、大学教授、野球ファン等総ての人間は、それぞれの社会で俗語を生み出す模範的小集団に所属している。ただこれ等の集団の或るものは他の集団よりも際立って人の目に付き易く、他の大部分の集団は、俗語を生み出す起爆力の点から言って、平凡で活気のない並み等の人間どもで構成されているという違いがあるだけである。

h. 俗語は短命である

ある任意の意味内容を表わすに我々は多数の用語を持っている。それ等

を同意語 (synonym) と称している。この事実は標準的用語 (standard words) の場合にせよ、二流用語 (substandard words) 即ち俗語の場合にせよ起っている現象である。例えば標準用語の “drunk” (「酔っぱらって」) が表わす意味を担っている俗語は不必要な程に多数である。それは、時代の移り変りによって、用いられる俗語も変る、という事実に起因し、辞典はそれ等のものを網羅しているに過ぎない。

数多くの小集団は年代の変る毎に休むことなくそれぞれの俗語を鑄造する。そしてそれ等の俗語は新しい用語として一般大衆の面前に一度は現れ出るが、その大部分のものは残念ながら、一般の認容を受けるに至る前に、既に、単に「一時的な気紛れな用語」 (fad words) として消え去ってしまう。一般の認容と人気とを獲得して多数の人間の頭脳の中に居残って使用されて長期にその命脉を維持するものは極めて少ない。

更にここで注意しなければならないことは、俗語に関して物を述べる場合に言う俗語とは、一般大衆の俗語ではなく言語研究者の俗語でしかないという事である。

というのは、医者や魔術師、盗賊の仲間等がやるように、意図的に隠語やくずれ語や符丁語を用いる場合を除いて、人々は一般に、自分の用いる用語や言い回しが、標準的用語 (standard) と明確に区別した上での俗語 (slang) であると意識して物を喋ることは滅多に無いからである。飽く迄言語は言語であり、伝達と自己表現の企てであるに過ぎない。或る用語、或る言い回しが辞典の中で「俗語」と考えられ、他の用語、他の言い回しが「隠語」とされ、「くずれ語」とされていたり、或いは「アングロサクソン語 (古代英語) から」と記述されていようとも、それは言語研究者でない一般大衆にとっては重要なことではない。

以上で我々は、一方で標準的語法・口語語法・方言と区別し、他方で隠語・くずれ語・符丁語と区別した上で、俗語の言語的位置を設定しようとの試みを行ってきた。そしてまたアメリカの俗語が生れ出たその古里を訪ね、その成育の模様を辿ってみた。

ここで我々が知り度いと思うのは、標準的語法の領域で、それが文語法

(literary use) であれ口語法 (colloquial use) であれ, それぞれの正統語法がある事を考えてみる時, 俗語と雖ども, たとい辞書の中で, 「標準的語法」(standard usage) の下位に位置する「二流語法」(substandard usage) と指示されているにせよ, それなりに一定の正統語法なり或いは大体に於て依って立つ用い方の基準なり傾向なりというものが有るのではなかろうか, という疑問である。我々が研究の柱をこの点に移してアメリカの俗語を説明する仕事は次章に譲ることにしよう。

参 考 文 献

- Dictionary of American Slang* by Harold Wentworth and Stuart Berg Flexner (1967)
- The American Language* by H. L. Mencken (1936)
- Supplement I. The American Language* by H. L. Mencken (1945)
- Supplement II. The American Language* by H. L. Mencken (1948)
- Webster's Third New International Dictionary*. Springfield, Mass. G. & C. Merriam Co.
- Compton's Pictured Encyclopedia*. Chicago. F. E. Compton Company.
- American English* by Albert H. Markwardt [má:kwɔ:t] (1958)
- A Dictionary of Modern American Usage* by H. W. Horwill. Printed in Japan (1958)
- A Dictionary of Americanisms on Historical Principles* edited by Mitford M. Mathews (1956)
- Chamber's Twentieth Century Dictionary* edited by William Geddie (1964)
- The Origin and Development of the English Language* by Thomas Pyles (1964)
- Webster's New World Dictionary of the American Language* (1964)
- Britanica World Language Dictionary*. Chicago. Encyclopedia Britanica, Inc.

英語英文学講座・アメリカ英語・歴史的及び地方的研究・重見博一, 英語英文学刊行会 (昭和9年)

英語英文学講座・英語と米語・富田義介, 英語英文学刊行会 (昭和8年)

現代アメリカ英語の研究, 岩崎良三, 小学館 (昭和21年)

現代米語文法, 尾上政治, 現代英文法講座 (昭和32年)

米英語対照辞典, 竹中治郎, 篠崎書林 (昭和27年)

アメリカ英語の特色(Ⅲ), 本論執筆者, 中京大学教養論叢, 第Ⅱ巻第2号 (1970)